

SHOW HEY シネマルーム

★★★★

帰れない山

2023年/イタリア・ベルギー・フランス映画  
配給：セテラ・インターナショナル/147分

2023 (令和5) 年5月10日鑑賞 シネ・リーブル梅田

Data 2023-57

監督・脚本：フェリックス・ヴァン・ヒュルニンゲン/シャルロット・ファンデルメルジュ

原作：パオロ・コネッティ『帰れない山』

出演：ルカ・マリネッリ/アレッサンドロ・ボルギ/フィリップ・ティエミ/エレナ・リエッティ

👁️👁️ みどころ

『帰れない山』とは何とも思わせぶりかつミステリー色いっぱいのタイトル(?)だが、さまざまな賞を受賞した原作は、アルプスの山を愛した作者の自叙伝。男同士の友情と父親との確執を核としたストーリーは、美しい山々の姿や山小屋建設風景を伴いながら展開していくので、そこに注目!

『マルコムX』(92年)の主人公は自らイスラム教の聖地であるサウジアラビアのメッカに渡る中で新たな境地に到達したが、父親との確執、父親との死別、遺言とも言うべき山小屋の建設を達成してもなお、自分の生き方を見つけれない本作の主人公は、チベットへ行き、「8つの山」の世界観を学ぶ中で少しずつ自分の道を発見!

なぜ『帰れない山』というタイトルになっているのかは最後に明かされるので、それまでの147分の物語を登山家になった気分ですっかり味わいたい。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

■□■舞台は北イタリアのモンテ・ローザ山麓!原作は?■□■

ナポレオンの「アルプス越え」は当時としては考えられない歴史的、軍事的快挙だが、その時の勇姿が、私たちがよく目にする油彩画「サン＝ベルナル峠を越えるボナパルト」だ。これは、1799年11月9日の「ブリュメールのクーデター」でフランスへの影響力を手にしたナポレオンがイタリアに戻ってフランス軍を補強し、前年にオーストリア(ハプスブルク君主国)に奪われたチザルピーナ共和国を取り戻すべく、1800年の春、予備軍を率いてグラン・サン・ベルナル峠を経由してアルプスを越えた



ことを記念して、フランスの画家ジャック＝ルイ・ダヴィッドが描いた絵で、「アルプスを超えるナポレオン」とも呼ばれている。しかして、本作の舞台になるのは一貫して、北イタリアの雄大なるモンテ・ローザ山麓だ。

といっても、日本人の私にはサン＝ベルナル峠とモンテ・ローザ山麓の位置関係がサッパリわからないが、第75回カンヌ国際映画祭で審査員賞を受賞した本作の原作は、パオロ・コネッティの『帰れない山』。同作は、イタリア文学界の最高峰ストレーガ賞と同賞ヤング部門をダブル受賞したそうだが、その価値も、日本人の私にはよくわからない。

しかし、本作が、「幼い頃から父親と登山に親しみ、1年の半分をアルプス山麓で、残りをミラノで過ごしながら執筆活動に専念した」というパオロ・コネッティの自伝的物語を映画化したものだということは、ピエトロの1人称の語りから始まる本作の冒頭を見ればすぐにわかる。147分という長尺になっている本作の舞台は一貫してモンテ・ローザ山麓になるので、まずはその美しい姿に注目！

## ■□■ 2人の少年の出会いと成長は？そして離別は？ ■□■

本拠地を北イタリアの都市トリノに置きながら、夏の休暇はアルプス山脈で2番目に高い山、モンテ・ローザ山麓のグラノ村で暮らす。それが、工場のエンジニアとして多忙な日常を送りながら、山を限りなく愛している父ジョヴァンニ（フィリッポ・ティエミ）と母フランチェスカ（エレナ・リエッティ）の生活流儀だったらしい。そのため、一人息子のピエトロ（ルーポ・バルビエロ）は1984年の夏休みの今、昔は183人の村人が住んでいたのに、今では14人しか住民がおらず、「この村で最後の子ども」と言われている牛飼いの少年、ブルーノ（クリスティアーノ・サッセッラ）と出会うことに。

1984年といえば、日本はずでにバブルがはじけ、“失われた30年”の時代に入っていたから、日本では夏休みの間ずっと山の生活を送ることなど到底考えられないが、イタリアではピエトロの家族は現実にそんな生活を送っていたようだ。そのため、都会育ちで繊細なピエトロと、山で生まれ育った野生味たっぷりのブルーノはたちまち親交を深め、かけがえのない親友になっていくことに。

また、ピエトロの両親にとってもブルーノは大切な存在となったから、適切な教育を受けていない彼のために、トリノの高校に通えるよう支援することを決め、それをブルーノの父親に相談したが、それに反発したブルーノの父親は息子をトリノに行かせまいと出稼ぎに連れ出してしまったから、アレレ。ピエトロとブルーノはその仲を裂かれてしまうことに。

## ■□■ 父子の断絶は？15年ぶり31歳での親友との再会は？ ■□■

誰にでも思春期と反抗期はあるもの。本作では思春期におけるピエトロ（アンドレア・パルマ）の女性関係は全く描かれないが、それに代わって（？）、山登りを巡る父親への反抗と確執が詳しく描かれていく。私は小学校時代、父親への反発が表向きになることはなかったが、中学に入り、さまざまな“自主性”が芽生え、強まる中、厳格でケチな父親に

対する反発が、反抗期と重なって膨張した。そのため、父親とはほとんど口をきかなくなったが、本作に見るピエトロもそれと同じだったらしい。そのため、ピエトロは夏の休暇中に父のジョヴァンニと共に山に行くこともやめた上、「せめて大学を卒業するように」と頼む父親に対し、「父さんみたいな人生は送らない!」と言い放ったからすごい。そのため、ピエトロは10年ほど父親と口もきいていなかったが、自分が生まれた当時の父親と同じ31歳になった今、妻子もなく、定職にさえ就いていない自分を見つめると・・・。

ピエトロがグラノー村を久々に訪れた理由はよくわからないが、そこでブルーノ（アレックスandro・ボルギ）と15年ぶりに再会したピエトロ（ルカ・マリネリ）は、①父にとってはこの村が理想の村だったこと、②この山に家を建ててほしいとブルーノに頼んでいたこと、を聞かされることになるほど、なるほど。父親はピエトロが村に行かなくなった後もブルーノ（フランチェスコ・パロンベリ）と一緒によく山に登り、実父と喧嘩したブルーノもまたピエトロの両親に助言を求めていたらしい。つまり、ピエトロの居ない村で、ブルーノとジョヴァンニは本物の親子のような存在だったわけだ。

そこから始まったのが、山の上に父親の願いだった家を建てること。これはブルーノの強い意志によるものだったが、自分の知らない父親の姿を知ったピエトロも、失われた時間を取り戻すべく、それに喜んで協力することに。

## ■□■家が完成！永遠に2人の家に！そう願ったが、さて？■□■

平地の建物の隣に物置を設置するのは簡単だが、アルプス山脈で2番目に高い山の上に小屋を建てるのは大変。しかも、それを2人の男だけでやるのは、材料や機材の運搬方法を考えただけでも大変だ。しかし、本作前半ではそれをブルーノとピエトロが力を合わせながら4ヶ月間でやり遂げる姿が描かれるので、その奮闘に拍手！もっとも、素人ながら建築には詳しいと自負している私は、柱や梁など大型の材料をロバだけで運ぶのは難しいと思っているが、本作はパオロ・コニエッティの原作に基づく“実話”だから信用せざるを得ない。

それはともかく、山小屋の完成を目の当たりにして、ブルーノは今、ジョヴァンニから聞かされていた遺言とも言うべき願いを実現した高揚感に、ピエトロは断絶していた亡父との関係を再構築できたという高揚感に浸っていた。そんな2人は、第1にこの山小屋を2人の家にする、第2に毎年この山小屋で一緒に夏を過ごすことを誓うことに。しかし、人生の目的をすでに見出していたブルーノは、以降その約束を守り続けたが、未だ自分の未来が見えないままのピエトロの方は・・・？人生はそれほど単純ではない。したがって、ブルーノとピエトロそれぞれの以降の女性関係（結婚）を含めて、一旦交わった2人の人生が、再び別れていく姿が描かれるので、それに注目！

## ■□■本作のテーマは？共同監督の思いは？■□■

本作のパンフレットには「監督 バックストーリー」がある。本作の脚本を書き、監督したのはフェリックス・ヴァン・ヒュルニンゲンとシャルロッテ・ファンデルメルシュ

夫妻だ。その冒頭には「正直、私たちはこの作品を一緒に作るようになるとは思っていませんでした。すべては、フェリックスがすでに取り組んでいた脚本から始まりました。」と書かれている。

それによれば、モンテ・ローザ山麓を舞台として2人の男たちの友情を描く本作のテーマは、①友情、②父親、③自然、④基本に立ち返る、⑤消えゆく世界、の5つにまとめられている。このうち、①、②、③のテーマは物語が始まるとすぐに理解できるが、難しいのは④と⑤。1949年生まれのは現在は74歳だが、その人生を大きく区分すれば、1974年の弁護士登録までの25年と、それ以降の49年。後半の49年をさらに2つに分けると、自社ビルを持ち、ホームページを開始した2001年が分岐点になる。したがって、25年単位で3つに区分できるから、これからの最終人生のMAXは残り25年ということになる。

それに対して、ピエトロとブルーノが出会ったのは12歳の時。そして、約15年間のブランクを経て2人が再会し、山小屋を建てることに成功したのは、2人が31歳の時だから、それからの2人の人生は洋々と開けていたはずだ。そう思いながら見ていると、ピエトロもブルーノも、それぞれ“ある女性”と結婚することになるが、そこらあたりから確実に2人の道が食い違ってくることになるので、それに注目！

## ■□■ピエトロはネパールへ！そこで知った「8つの山」は？■□■

私はスパイク・リー監督、デンゼル・ワシントン主演の『マルコムX』(92年)を観て、その壮絶な人生にビックリした。とりわけ考えさせられたのは、アメリカ生まれの黒人である主人公が、刑務所内で入信した「ネイション・オブ・イスラム」の活動を展開する中でメキメキと頭角を現したにもかかわらず、指導者のイライジャムハマドと対立していく中、自らイスラム教の聖地であるサウジアラビアのメッカに渡る中で新たな境地に到達していく姿だ。それと同じように本作では、いかにもびったりの伴侶を見つけ山小屋の中での夫婦2人だけの新生活を定着させたブルーノに比べて、なかなか自分の将来を見つけれないピエトロが、言葉も通じないチベットの山々へ行くところから、彼の変化が顕著になってくる。それがなぜかはよくわからないが、そこでハッキリしているのは彼が「8つの山」という古代インドの世界観を学んだことが大きく効いていること。「監督 バックストーリー」の解説によれば、それは下記の通りだ。すなわち、

世界の中心には最も高い山、須弥山(スメール山、しゅみせん)があり、その周りを海、そして8つの山に囲まれている。8つの山すべてに登った者と、須弥山に登った者、どちらがより多くのことを学んだのでしょうか。

※古代インドの世界観で、世界の中心にそびえる聖なる山。仏教、バラモン教、ジャイナ教、ヒンドゥー教にも共有されている概念。ピエトロはネパールでこの話を知り、ブルーノに伝える。

こんな世界観の理解は世俗色いっぱい、煩惱、欲望いっぱいの私には難しいが、親友ブル

一ノとの共同作業による山小屋完成にもかかわらず、なお自分の生き方を見つけられなかったピエトロにとって、この世界観はぴったりだったらしい。そんな世界観でネパールの山々を巡っているうちに、ピエトロも最適の女性と巡り合って結婚。さあ、そうなれば、親友2人の再々度の出会いは？そして、かつて、父親ジョヴァンニが夏休みになると登っていたモンテ・ローザ山麓への登頂は？

## ■□■なぜ『帰れない山』というタイトルに？■□■

本作後半のそんなストーリーを美しい大自然とともに楽しむ中、なぜ本作が「帰れない山」と題されているのかについてももしっかり考えたい。ちなみに、山登りの好きな人は、ケルンという登山用語を知っているはず。これは、山頂や登山道などの道標になるように、石を円錐状（ピラミッド型）に積み上げたものこと。登山道の道標を示す場合は登山道と平行になるように積み上げ、尾根などの迷いやすい登山道に設置されている。しかし、特殊なケースとしては、遭難地点に供養のための慰霊碑として作られる場合もあるし、また道標や登山者の慰霊の意味以外に、遊び半分の興味本位で積み上げられているものもあるので、それには要注意らしい。

しかして、本作導入部に登場するケルンは、1984年に父親のジョヴァンニが息子のピエトロとはじめてモンテ・ローザ山麓のひとつに登頂した時に積み上げたものだ。本作のパンフレットには、1984年8月付の「11歳の息子ピエトロと登頂。息子に先導されて山に登る日も近いだろう。生涯の思い出に残る最高の登山だった。ジョヴァンニ・グアスティ」と書かれたポストカードと、1994年7月付の「グラナー村から2時間37分で登頂。ハイペース。アイベックスと驚に遭遇。相棒と同じ21歳に戻った気分だ。ジョヴァンニ&ブルーノ」と書かれたポストカードが入っている。これらを見れば、山登りを通じて、父親ジョヴァンニと息子ピエトロの絆が形づくられ、またジョヴァンニとブルーノの絆が形づくられてきたことがよくわかる。大阪万博の時には多くのタイムカプセルが未来へのメッセージとして埋められたが、このポストカードを発見した時のピエトロの思いは如何に？それをあなた自身でしっかり感じ取りながら、『帰れない山』というタイトルの意味をしっかり考えたい。

2023（令和5）年5月15日記